

広大なヨシ原に眠る問いの力を信じて

飯島 博



渡良瀬遊水池という名称の由来は、もともと氾濫原に適応した人々や野生生物の営みがあった場に、治水という管理のための機能が与えられたことによる。治水は統治の道具といわれるように、明治以降近代化を突き進んで来たこの国の統治機構の中で、谷中村という地名をもった土地が渡良瀬遊水池という機能に置き換えられたのだ。そして、治水機能への場の置き換えは、川や人、生物などによる働きかけや相互作用を無視して行われてきた。

以前、私は渡良瀬遊水池には社会を変える力があると発言したことがある。それは、渡良瀬遊水池には問いの力が眠っているからだ。そこには、近代化によって埋没させられた多くの問い掛ける声が、今も潜在している。

そのひとつが、百年前に田中正造が亡くなる直前に仲間達に残した次の言葉だ。「皆さんの正造への同情で、問題への同情ではない。問題から言う時には、ここも敵地で

ある。」私はこの言葉を初めて知ったときに、大きな衝撃を受けたのを覚えている。そして、田中正造が残した問いの力に、私は圧倒された。

私は彼の言葉を、田中正造というひとつの人物像、それも偉人という固定されたひとつの像に治められることに對する強烈な拒否表明と考えている。彼は歴史の中に位置付けられた人物としてではなく、ひとつの場として、それも問いを発し続ける場として生き続けることを求めたのではないか。今も尚、可能的存在として人々に問い掛けるために。

縁があつて、私は渡良瀬氾濫原の再生をめざす「わたらせ未来プロジェクト」や「わたらせ未来基金」の立ち上げに関わらせてもらったが、それらの企画案を構想したときに、いつも私の中では田中正造や多くの人々が残した問い掛けが響いていた。数年間ではあつたが、霞ヶ浦での市民

型公共事業アサザプロジェクトとわたらせ未来プロジェクトの掛け持ちで、精神的にも肉体的にもしんどいこともあつたが、いつも私の背中を押してくれる問いの力があつた。多くの人々の努力によって、渡良瀬遊水池はラムサール条約の登録湿地となった今こそ、遊水池を再び自然や過去の人々からの問い掛けに応えるための場として捉え直していくことが求められているのではないか。その場は、渡良瀬川流域へ足尾山地へと広がっていく水系一環の思想を育むことになるだろう。

逆に、登録湿地という制度の枠組みに発想が縛られ、官僚や研究者が指導する閉じられた系の中の自己完結型の保全や再生といった手法や技法に終始することになれば、自然や社会の中で生成する場としての機能が失われ、田中正造から次のような批判を受けることになるだろう。「盆栽花流の学者多し。造るは自然を造る。造れば自然の如し。自然を害してまた自然を見せんとす。」

登録湿地になったからといって、統治システムの中での治水機能という権力による頸木を外されたわけではない。次の展開は、「自治人民の自治権は住民より発動すべし」という田中正造の言葉の中にあるように思う。

わたらせ未来プロジェクトの中で、私は将来関東地方にコウノトリが生息することを目標にすえ、そのために渡良瀬遊水池と霞ヶ浦を互いに補完し合う関東平野の二大湿地として連携していくことを提案させてもらった。多くの困難を乗り越え渡良瀬遊水池がラムサール条約の登録湿地になった今、霞ヶ浦も登録をめざし保全と再生の取り組みを強めていきたいと考えている。

霞ヶ浦では、逆水門の閉鎖や水位操作による生態系や水質への影響に加え、あらたに放射能汚染という重い問題が課せられている。かつて、足尾鉍毒事件では原因への対策を国が怠り、その代償として谷中村が遊水池化された。そして、今霞ヶ浦が福島第一原発事故による放射能汚染によって脅かされている。国はここでも根本的な対策を講じず、非常時にも関わらず逆水門の閉鎖を続け湖水を滞留させ事態を深刻化させようとしている。

渡良瀬遊水池から発せられる問い掛け、その問いの力は三・一一以降益々大きな意味を持つことになった。渡良瀬遊水池に関わってこられた皆さんに敬意を表すると共に、その取り組みがさらに発展していくことを願っている。

「いいじま ひろし NPO法人アサザ基金代表理事」